

## ●第19回BATJ（英国日本語教育学会）大会

（2016年9月2日-3日，イギリス：ノリッチ）

報告者：大枝由佳（リーズ大学，主催者）

2016年9月2日・3日，英国イースト・アングリア大学において第19回BATJ大会が開催された。本大会は，国際交流基金の助成および在英国日本国大使館の後援のもと，梅澤薫大会実行委員長が所属するイースト・アングリア大学の全面的な協力を得て英国日本語教育学会

（BATJ）が主催したものである。参加者は約50名，英国内の研究者のみならず日本，欧州からの参加もあり，共通のテーマである日本語教育について国際学術交流や情報交換を行った。

大会1日目の開会式では，イースト・アングリア大学 School of Politics, Philosophy, Language and Communication Studies の Dr Marie-Noëlle Guillot より歓迎スピーチ，国際交流基金ロンドン文化センターの高鳥まな所長より激励のお言葉をいただいた。基調講演には米国ウィスコンシン大学マディソン校の森純子教授をお迎えし，「会話分析の視点から考える第二言語習得と日本語教育」という題目で，会話分析の方法論や研究成果をどのように日本語教育に応用することができるかについてお話いただいた。その後，研究発表3本，実践報告発表1本があり，参加者主導型の「BATJ フォーラム」が行われた。フォーラムは，多くの会員が一堂に会することのできる年に一度のBATJ大会において，「参加者それぞれがもっと発信・受信できる交流の場を」と企画されたものである。今回は，本学会誌『BATJ ジャーナル』が実施した会員アンケート調査のテーマでもあった「オンライン学習支援システム」を採り上げ，参加者それぞれの現場での現状について積極的な討論・意見交換が繰り広げられた。

大会2日目はBATJ総会の後，イースト・アングリア大学の Dr Joanna Drugan による招待講演 “Translation as a teaching tool - Challenges and suggestions from translation studies and the translation industry” があり，ポスター発表3本，研究発表1本，実践報告1本の後，森純子教授によるワークショップ「自然会話のビデオデータから学ぶこと・学ばせること」で録音・録画された自然会話をどのように日本語の授業で活用できるかについて学んだ。

口頭発表「日本語中上級学習者による英日翻訳におけるコロケーションの使用」，「敬語の過剰使用－上級日本語学習者と母語話者の比較から－」，「クラスの実態に応じた授業づくり－初級レベルの日本語コースを例に－」，「ラーニング・ログ・システムと e-book を活用したシームレスな L2 学習環境」，「話し言葉コーパスにおける複合辞『トシテ』の使用実態について」，「日本語の受け身の教え方の2つのアプローチ」のほか，「日本語学習における自律学習と教師の支援－授業アンケートから－」，「認知負荷理論の観点からリスニング教材の有効性をみる予備調査」，「初級日本語クラスにおける『書く』活動のメリット－仮名による自己表現作文指導の試み－」がポスター発表され，計9本の発表は多彩で充実した内容のものであった。これらの発表は『BATJ ジャーナル 18号』（2017年9月発行）に掲載される予定である。本学会の概要と活動および2017年第20回BATJ大会の詳細は，BATJ ホームページ（[www.batj.org.uk](http://www.batj.org.uk)）を参照されたい。